

集詩·高島高

山脈
地帶

詩集
山脈地帶

高島
高

部版出社旗

詩集・山脈地帶・高島 高著



旗社出版部

これらを親しき人々並びにわれを常に慰め、
励げまし、
復活せしめてくれる故郷の山河にささぐ

装
幀

相澤光朗

序

著者高島君、深く混沌を感し、凜然たるものを求めて、砕くるを辞しない。

かような人を、私は純粹な詩人と呼ぶ。高島君は純粹な詩人である。日本の新しい詩歌の時代のために戦っている戦士である。君の詩を読んで無感動な輩は恥ずるがよい。

昭和十五年八月

浅野 晃

目次

第一部	
北方五光景	三
夜戦塵	二〇
麦	三
征野	二四
日本人に題す	二七
熱河	三〇
桜	三三
戦い	三四
溪潭譜	三六
北方山水	三八
馬込風景	四〇
大井町の記憶	四三
青空について	四四

立証ある詩論	四六
北の貌	四九
横浜山上の詩	五三
横浜風景	五五
北の銃後	五九
野戦病院への手紙	六二
第二部	
山脈地帯	七
故郷挽歌	七
若き日山に登る	八
バツハ	八
自画像	八
恋愛行	八
執念	八

山脈地帯

業	………	三
内 部	………	四
あ る 頁	………	六
海	………	九
茶 談	………	一〇
光る意志	………	一三
処 生 図	………	一三
雪国小景	………	一五
緑ヶ丘追想	………	一七
劔の夜明けに	………	二〇
銀座で	………	二四
附 録		
フロイトと詩の理解(エッセイ)	………	二九
あとがき	………	三三
著者略歴	………	三六

山脈地帶

第一部

北方五光景

北アルプス幻想

ガラス窓のガラスに冴えた白蠟色はくろうの山脈が見え

その襞ひだのわずかな陰影が見え

凍った湖のごとき天空が見え

ガラス窓のガラスにうつる

火鉢の灰にまみれたわずかな炭火が見え

雪が全く晴れ上った

僕の真白なスケッチブックが見え

北アルプス雪景

急傾斜の皮膚がきらめいて

森がまるで鴉に見える

沈澱した雲というものはきかないが

この空は画家には重すぎるだろう

たとえばクモリガラスとかカットグラスとか

そんなものは氷となんの関係があるのだろう

とにかく散在する森は鴉らで

風景が死線をそこから突破している

雪の湖

めぐりの雪をうつしているので

雪はいまにも落ちこみそうにしている

ここだけに世界があるというように

それは平明な鏡だ

立山おろし嵐

凍えたさざらに似た気流は

屋根や森の頭だけのこした村々の雪に

つきあたり

遠く山脈の中腹へと白雪を追いまくる

見よ白雪の織る白雪の襞

そのわずかな色の陰影について

はるかに骨灰こつばいの天をつきはなすはるかに骨灰の天をつきはなす

銃列のように鉄の意欲をもつのか

雪ふらば又もやちつては蹴けり

雪の温度を奪いさる

註 立山は一名太刀山とも書き北アルプス山脈峻峰中の峻峰である。その雲表高くそび

えたる巖然、颯爽たる姿体は、実に北方魂の火のとき烈々たるシンボルである。

この山麓より、かつて日本一太刀山を出し、又、今まさに皇国のために満丈げんぢょうの気を吐いている幾多の北方勇士をわれらの第一線に送っている。そしてこれらあらゆる

北方人は、必ず寒冷膚を破る立山嵐おろしによって生まれ、又きたえられるのである。

北 方

日に日に氷にきざまれてゆく空の青

湖は眼鏡を沈ませて

ますます山脈の雪膚はだをのぞきこむ

幾多の白鳥は黙りこみ

岸の氷をかむ流れに流れる

銃を脊にあの人は行った

山脈を越えてあの人が行った

氷焰ひょうえんのごとき魂の若者であった

雪はまた降りしきるだろう

雪は消えないだろう

だがあの人はかえってほこない

氷をかむ流れの遠い戦場の岸に立って

銃じゆを擬ぎしたままふるさとのこと

考えるだろうか

ふるさとは今頃熊の出頃だと

夜戦塵やせんじん

月の化けた山脈は

ただの絵ではない

光をのばす銃剣ら

僕はいつの日そこにいたのであろうか

生きるもの死ぬるものこの刹那せつなをかけて

幾千年前からの支那しなの月は

流血の惨敗になれているんだろう

たちまち山脈の一角をとどろかす

巨砲の角度と影絵

支那の夜空にはいまでも龍がすむのか

真紅の火を吹く龍ら

龍らをもおどろかすいかずちの類

無敵皇軍の包囲は

夜陰をこめて刻々と行われる

麦

——麦と兵隊に

ものの本で読んだのだが

支那しなの空は

湖のように青く澄んでいるそうだ

すてられた青龍刀にたまっている一片の雲

雲ははるかかの崩れた亡国の城壁を見ないですぎるであろうか

日本の兵士らの瞳には支那の雲はうつらない

あっち向いて休んでいる兵士ら

こっち向いて語っている兵士ら

兵士らの額の汗と共にふかくしみこんでいる祖国

日の丸の旗は世界の果てでも透明だ

ふるさとの別れた人々の面影のように

風がなびけば

風景は無量のおもいの波をうつ

征^{せい} 野^や

延々たる山脈に入る道は

どこからもどこからもつづいてるのであった

遠く遠くすぎ去つて来た曠野^{こう}にくつきりと砲車の轍^{わだち}の跡

大陸の春は花もなく

祖国をはるかに離れた

兵士らの胸には

花のある

日本の春の風景が

どんなになつかしく思い出されていることだろう

しかしもはや一滴の血液も

一片れの肉塊も

みんな君国にささげてしまった身だ

部隊の遠景から急にクローズアップされた

人なつこい部隊長の笑顔にぶつかると

ニュース映画館で僕はもはやたまたまなくなってしまった

あの山脈のむこうには今も敵の銃眼が待ちかまえている

日本人に題す

長城をはるかにしみじみと白木の墓標の前に立てる

一兵士のそばを

いつまでも離れない黄色い蝶と

誰れかのものした本でよんだことがあつた

僕は近頃万里の長城の夢をよく見る

黄色い蝶と長城の関係は知らないが

心から祈るその兵士と彼の戦友の墓標のことも

見わたすかぎり荒涼たる曠野こうやの真只中まただなかに

はつきりと思いうかべることが出来る

人間とは思えぬ悲壮なる死の方について

しかも自分を育んでくれた祖国の興廢こうはいの為によることで

大陸の土と消えてしまった戦友の墓標と

その死を心からうらやみ悼むいたその親友の兵士について

二千有餘年来の日本の強さをはつきりと信ずることが出来る

その兵士と同じく僕も日本人であるため

僕は近頃見たこともない銃声とどろく支那の空を幾晩も幾晩もつづいて夢みることがある

熱^{ねつ}

河^か

眉^{まゆ}よりもきびしい月があつた

黄塵^{おうじん}のあれた夜をこめて

影らの起伏はものすごい山河のかたちで

延々と起伏しあつてはいた

考えればどこにでも銃眼のある夜空であつたが

鹿のような斥候^{せつこう}がただ一人はるか影のあたりから

静かに馬を走らせて帰って来た

斥候は死んではいなかった

桜

日本にっぽんが

世界との境界をもっていることは

緑線で示された地図がある

春の真昼は

世界中の太陽をひと所にあつめるとい

たとえば

青空が山以外の空間の全部であるように

張った根らは

幹よりも強く

冬に耐え

今を盛りと花々に風を吹かせている

それは

日本のつまらない片田舎でさえ風景である

戦い

影らのひしめき合う暗雲の下

倒れるもの立ち上るもの おお

それは不思議な影絵だ

空にくろく

破天の火花よ

同じく

風景は、もう見てはいけない

同じく

石はさく裂するだろう

骨灰の歴史について

風は曇天と共にまき上げられ

生死と共に吹きとばされる黄塵

悍馬よ 悍馬よ

*性質の荒々しい馬

渓潭譜^{けいたん*}

— 黒部峡谷に寄す

36

* 谷川の深いふち

その岩らの物語りは

あまりに怪奇である

逆巻く白蛇

のがれゆく碧水^{へきすい*}

岩らの物語りは

真昼の太陽が知っているのであろうか

* 青々と深く澄んだ水

昔も今も

彼方懸崖^{けんがい}は

碧水を映し傲然^{ごうぜん}と

その岩らを見下せば

岩らは懸崖に対してねらい

碧水をよぶ白蛇の叫びは

今も昔も身がよだつ

37

北方山水

山巒ひだの苔らについて

山は山と重り合って青空をかぎる

その頂上の一片の白雲は

いつの日か万年の氷の風を喰べたのだという

光る風らの行方について

河は至極しごく一片の白雲には無関心である

手をふるれば

手は切れるのだという

雪ばっかりを見ていたのに

桃の花さえ咲いていて

何んにも知らぬ春の日射しが

行方も知らぬ河の行方を

まじまじと見守っている

馬込風景^{まごめ}

— 或は早春の田野

燃え上る新緑の息吹らを馳^かけめぐる赤奔馬^{ほんば*}の群れである

*勢いよく走る馬

鬘^{たがみ}は赤く、ときには黒ぐろとはるか丘の防風林のかなたにさえ馳^かけて

ゆく

断層 きりひらかれた断層^{ひだ}の襞

真昼の月は防風林の脊の上に銀を燦^{いぶ}してにぶい

友よ

無風帯の截断^{せつだん*}面をさまよいくだつてくるあの風の行方をきかないか

*たち切ること

それは取り残された枯色の笹らの群れにさえたはずもうとするのであ
ろうか、あるいは水のある方へうかがおうとするのであろうか、浮
いてはとどまりとどまっては浮いてくる風なのである

截断された風景の色彩のあらゆる展望の肉体らはいまゆくりなくもお
とずれてくる春の衣裳をたのしんでいる

附記 東京市大森区馬込は新興都市のうち僕のもっとも好きな土地である。それは、

其^{そこ}処^こには僕の親しい文学的知人たちと、遅^{おく}しい田野の風景があるからである。

大井町の記憶

——ある友のうたえる

いつも曇った靄もやのある空をかつて

文学的だとH氏が言った

だがその頃一人で街を歩く癖くせのあった僕は

三ツ又の坂まで恋愛について考えながら歩くことが多かった

萩原朔太郎氏の詩にすすけた

大井町の工場街をたくみにうたった詩があった

そうだどんなはやかな商店でも

大井町では何か一種の荒廃が感じられ

×子のことが胸いっぱいあふれていたその頃の僕には

大井町は

たまらない魅力と陰鬱いんうつな町であった

OASISオアシスとこう喫茶店がそれで

僕はいまでもそこに僕の青春と涙の全部を

置いて来たように考える

青空について (シネ・ポエム)

埋められた骨片こっぺんは木の根の近くにあるのだろう

木の根にまつわる木の根

乾ひからびたくろ土の伝説近く

緑の繁った繁みにまつわる影、影

同じく

僕は光を愛するだろう

それ以外のことは書けない

同じく

森が沈む

一本の道が沈む

家が沈む

海の沈んだ近くの石段は

純白のほかの色ではない

立証ある詩論

ジグムンド・フロイド先生が

間違いの学説を考えはじめたはじまりに

すでにフロイド先生自身の間違いが起っていた

その学説の間違いは

純粹科学的医師フロイド先生の詩だとも云える

原始は

過去を経過してはじめて

原始として役立つのだ

果して詩は人間の生存に役立ったか

ドイツのはかせグンドルフは

言葉の悪魔説をやりはじめた頃

ヴァレリー御大は顕微鏡下で詩の染色に夢中であった

世界の現実をマイナスした全てがポエジイであり得るならば

詩人よ

詩はソウレ塵埃じんあい*のようじんあい*にぐるぐると君たちのめぐりをとびまわってい

*塵埃はちりやほこりのこと

るのでないか

48

北の貌

—— 親不知附近の未明

* 富山と新潟の県境にある
海岸地名

1

飢えている海のむこうは暗く壁画のように啞黙^{おしなま}のまま不安げな眉を寄せ合っている。冷えた灰。灰の屍。白い歯等は組み合いつ噛み合いつ碎けに碎けちるであろう。

2

皮膚病^{ひふ}の海は皮膚病の治癒^{ちゆ}に近き落屑^{らくせつ}期の粗面^{こめん}がむずかゆいのであろうか。絶え間なく落屑の上には落屑が積み重ねられてゆく……

49

3

沈んだ^{はい}廃園。死面^{デスマスク}。手……

4

死面の齒列は階調の宿命ゆえに絶え間なき笑いを粗雑な死面に与えねばならぬのだろうか。粗雑な笑いはときには皮膚病の海を角度のむこうで吠えさせる。霧^{もや}のむこうで。怪獣のように、怪獣のように。白く白く銀蛇はのがれにのがれてゆく……

5

遂に銀蛇は眠りこける巖^{いわ}等に挑^{いど}みゆくのであろうか。挑^{いど}まれば巖^{いわ}等は獣類のように眼^めを怒らせる。

6

獣類の眼^めに明るむ灰色。皺^{しわ}を抱く海。海を抱く皺。うずまけばうずまいたまま漂白されゆく皺等は次第に漂白されゆく皺等の上にひろがりゆく……

7

夜明けよ、夜明けよ、

横浜山上の詩

——ある年の記念のために

断崖の上の白亜館はくあに

真昼の日光がチカチカとあたっている

どこかで蜜柑みかんの実る思いがして

海の遠くの青空を見ている

青空はどこまでいっても青空であろうか

波は濃厚な青空の色に動いている

遠近の丘々を傾斜して走る緑ら

その突端の断崖の風景について

風に吹かれている赤い小旗について

臨海試験所の白い帆船について

かつて自ら消えうせた海の詩人のことが

忘れられた恋の瞳のように思い出されてくる日であった

横浜風景

街はずれの河端^{かたん}河端には柳がある

それは午後の冬の太陽をアスファルトの上にくく投げかけている柳
らである

河には橋がいくつもいくつもつづいていて

橋脚らはかすんだ街の鏡をしずかにやぶっている

赤い屋根らの異国調は

世間の概念に似て

かなたはげた緑の油絵の断層にちらばっている

海は見えないが

はるかにつづく青空は断層のうしろの海の匂でいっぱいだ

独特の波止場だとか、黒縞のある白い外国船らの連想は

市の中心地伊勢^{いせ}佐木^{さき}町にやって来てさえ

黒蟻^{あり}のような街の雑踏を見てさえ

まざまざとその様子に似ているのである

街をゆく乙女の眉も波止場なら

乙女の瞳も波止場なら

乙女の唇も波止場である

海港型のオールバックの髪にひらひらする赤いリボン

それは立ちならぶ商店のショウウイン드의透明ガラスよりもはつきりする

北の銃後

1

いくつもの牙を磨く山々

牙は日に日に秋空に鋭く

どこかでひねもす爆音がきこえるようだ

飛行機の影は見えないが

あれはひびきだ

つづき空のひびきなのかも知れない

人々は待っているのだ

終日山をみつめながら人々は幾日も幾夜もじっと待っているのだ

2

噂うわさは雲のようにひろがって行った

秋空を見上げながら人々は何かとささやきあつた

誰も悲しむものはなかった

誰も怒るものはいなかった

その北アルプスの小さな山麓の町では

門毎かどの日の丸の旗の以外に

何物の信仰も尊たばれなかった

事実は現実であつた

終日血のようなどよめきに人々はどよめいた

「万歳」「万歳」であつた

3

町角には幾人もの娘が立っていた

女たちはそれに叮嚀ていねいに一人一人針をくれてやった

用務の自転車を下りて差出された布に

拙つたない「力」の字を書いたこの田舎の医者に

まだ年若い少年がお辞儀した

どうなるのか人々にはわからなかった

わからなかったが人々は緊張した

何かと真剣に助け合った

やがて雪が来ようとしているこの山麓の町に

その雪を踏みくだいてあの山のずっとむこうから必ずやって来なくて

はならないものがあるのだ

やって来なくてはならないものがあるのだ

と人々は信じている

4

角毎にはひねもす日の丸の大旗小旗

いくつもの牙を磨く山々

牙は日に日に秋空に鋭く

附記 この度の戦いに友人幾多の戦死に遭遇し感慨措くところを知らず。

野戦病院への手紙

ちよつとの擦り傷だと云って来たが

それはどの程度の傷か僕にはよくわかる

繻帯ほうたいをしていてわからぬと思うから

君はそんなことが云えるのだ

君たちの仲間は

みんな繻帯をしてベッドにかくされているから

そんなことはなんでもないと考えている

そして人々にその程度のことを話し

君たちは平気な顔で笑ってさえみせている

それは君たちは君たち以上になっているからだ

肉体の傷以上に魂が磨かれているからだ

と僕は考える

君の繻帯の中にかくされてある傷のことは

君が云わなくとも医者である僕にはわかっている

それはわれわれの日常では殆んど見かけない程の傷だ

だがそんなことを君は何んとも思っていないことも

突撃する日の丸の旗と鉄兜かぶとと

曠野こうやの草と崩れたあか土と

そうだ君の祖国愛は君を君以上にしているのだ

日の丸の旗の下に

*広々とした野

君はいま鬱勃^{うつぼつ}*として崇高だ

それは民族としての崇高さだ

君の血液にも不肖僕^{ふしょう}の血液にも流れている

それは日本人としての崇高さなのだ

肉体を投げた人類最高の強さは

君を尚^{なお}その負傷から切りはなさせているのだ

君のあせるのも無理はない

そして戦争というものも

非戦闘員である僕にもあらしわかつて来た

*内にこもっていた意気が
高まって外にあふれ出よ
うとするさま

(進め！ あたってくださいろ)

それは祖国のためにだ

それは自分を生んだ国のためにだ

その言葉の実用を最も忠実に行った君

そういう君があらゆる兵士の一人一人なのだ

僕たちにはわかる

僕たちにはわかる

日本が

どんなに強く

どんなに負けないかは

だが待つてくれ給え

君がいましきりに欲している

白いベッドと白い繻帯を

荒漠たる曠野と鉄兜に代えようとする以上に

君の魂は充分にたたかっている

たたかっているのだ

と僕は云いたいのだ

君の晴れの日を祝ったあの北方の山河は

いま君の名誉の負傷を知っているかのように

常以上に生き生きとした秋晴れを装っている

そして悠々と自信たつぷりだ

しずかに落ちついた君よ

いま君はさらに尚重要な非戦の戦士なのだから

それは犠牲というもの以上の尊さだ

君の血をよく知っている僕

僕の血をよく知っている君

このような君と僕は

あらゆる国民全部の君と僕だ

一つの巨大な流通

それは国民全体の血液の流通なのだ

手段や科学や主義以上の流通なのだ

それが今しつかりと 手を握って

戦って 構えている

それ以上僕たちは何を云うべきであろうか

何をあせるべきであろうか

山脈地帯

第二部

山脈地帯

第一章

あんな曇り雲が光るのは

あれは山脈の雪のせいだ

曇り雲それ自身に発光体があると考えるのは

それは君の画かきとしての感覚のせいだ

本当は雪そのものは鉛色なんだ

どんなに白く見える雪だって

鉛色としての一種の光の要素をもっているんだ

それは色そのものとして受ける感覚より
温度を失っているという冷却感のせいかも知れない
だからこの裸木の立木なども

雲の陰影の色というより雪の陰影の色といった方がたしかなんだ
(ところでこんな雪の地方では

何んでもかんでも陰影を帯びてくるものなんだ

たとえば魂にだってあの裸木はだかぎ*以上の陰影がさす)

だからあの山脈ひだひだの巒々はだかぎ*にある陰影などは

この地方の風景を現すに最も重要なシンボルなんだ

それは冷却感を表象することよりも

心理的な意味における神秘感にとつて重大なんだ

時々小鳥がああの山脈の脊の上で叩き落されるのは

*バクチノキ

あれは冷却感よりそのような神秘感のためかも知れない

もつと云えばあれは鳥さえ落すような鋭い刃物をもっているんだ

(君にいつかはなしたろう

N村の美也子さんが雪の山脈の中で死んだことを

美貌びぼうで人間である美也子さんは勿論鳥もちろんとは一緒に出来ないけれど

そのような神秘的な刃物で切られたことはたしかだね

しかし雪が解けてから美也子さんは鳥のように骨ばかりになっていた

どつちかと云えば雪国の人は悲劇になれているね

これで一たん嵐になったら悲劇だなどという生やさしいものじゃない

んだから

東京生れの君にもそれはわかるだろう)

この麓ふもとの村の人たちは死ぬことなどはなんとも思っちゃいないんだ

それはあらゆる自然現象と同じようにごく自然なことだと思っ
ている生とか死とか、そんなことは考えられないんだ

その意味ではこの村人はニイチェ以上に超人だよ

都会生れの君が、その上芸術家である君が感ずる感覚などというもの
もこの村では一本の髪の毛よりも無用なものなんだ

彼らは子供を生んでそして死んで行くばかりさ

だからかえってこの雪の色がこんなに凄味すじみのある陰影を僕らに与える
のかも知れない

恋愛だつて恋愛それ自身としてはけつして感じて恋愛なんかしていな

いんだ

だからあの山脈の脊の上で鳥が凍死するのもあたりまえかも知れない
悲惨といえこれ以上の悲惨がないね

(だがたった一人美也子さんだけは考えたんだ

——しかし考えるものはここでは生きてゆけないんだ

結局鳥のように骨ばかりになるか狂うかより他に手がないんだよ

そして相手の男は君どうなったと思う?)

風は裸木をゆりうごかして吹いて来た

平原の雪がうずまきのような形で浮き立ち

どっしりとした雲が少しずつ山脈の脊の上で光った腹を見せながら位

置をかえはじめる

(その男はね、美也子さんのような直接行動には行けなかったんだ。

卑怯ひきょうといえは卑怯だがね。

——しかし、結局哲学に入つて行つて今ではもう流刑人のようになってしまつているさ。

ここでは知性は必ず一種の復しうを受けるんだ。自然と文化の闘いと云うかね。ここではそれ程自然の偉力というものは絶対的なんだ。自然にそむく者のことごとくは手ひどい目に会うのさ。考えてみれば無茶な話だがね。それ程無智はここでは絶対的なんだ。都会生活者の君にはこういうことはちよつとわかりにくいかも知れないがね。そろそろ嵐になって来たぞ。これは物凄い吹雪になるぜ。あ、その男が僕だつていうのかい？ そんなことはどうでもいいじゃないか。ただ君にこの風景を写生して貰うために、そしてこの風景たちの陰影を説明するために云つたまでの話さ。さああの森まで歩こう。あそこのアトリエにはもう火の用意もしてあるはずだ。そしてあそこでは充分に、君の素晴らしいタッチによって、この雪の山脈地帯の風景の再生が見れるというわけなんだ)

雪にめりこまないようにしたまえ

君も知性人の一人だから、自然はどんな風にもこの自然自身の陰影を増

すための復しう、しないともかぎらないね

あぶなかつたら僕につかまるとたまえ

(第一章終り)

附記 作者は第一章、第二章、第三章、夜明けを意図せる第四章まで書きしが、意に満たず後日を期しここに第一章のみを発表す。

故郷挽歌

—— 僕はこの若き日の詩篇を愛するがゆえに憎む

雲は低くて暗く

その上光るのは

あれは立山連峰の雪のせいだ

こんな重たい空気はめったにあるものではなく

(つるぎたてやま)

こんな鋭い山脈系はめったにあるものではないというのは

この地方の風景画家たちのエスプリらしいが

ところで僕はたった今年後三時五十分着の

上野発列車から下り立ったばかりの旅の男だ

列車つかれの眼窓がんそうには

はるか山脈の頂上の雪の層がきらきら光り

この停車場の古風なことは

いつまでたってもまがった針の柱時計や

朽ちた四角柱の陰影やこわれた窓の窓ガラス

窓ガラスの外の積荷の影には

幼なじみの×町のTさんやNさんがいるようだけれど

僕はなるべく知らないふりをしたいので

切符を渡すと帽子を真深くかむり

さて雪道を先ず山麓の方に向けてとりたいたいと思う

町の中は今もやっぱり魚屋さんやお菓子屋さんや

銀行や荒物屋さんでにぎわっているだろうけれど

僕は今では帰郷者でもなく成功者でもなく

一介の行きずりの旅の男だし

又町中自転車や乗合自動車をさけたりするのがうるさいし

それにもまして町湯の噂^{うわさ}たちに花さかせてやるのは業腹^{ごうはら}だ

僕の生れた町だというのはあの雪の中の灯だけでけっこう

あの灯たちを一つ二つとかぞえながら

今日はせめて夜中まであの山麓の雪道でもあてどなくさまよい歩いて

みよう

若き日山に登る

——ある年の思い出として自殺せるKに

雲からずりおちる天

登るほどに岩鐘^{かね}らにきざみこまれた岩巒^{ひだ}に吹きあたる風は

あの空に光っているにぶ色^{*}の雲のまんまの色であろうか

これはたしかに陰影だ

谷の底が見えず向う山の滝や山あいまでがにぶ色一色で

どこを見ても鈍角鋭角ばかりのこの岩山では

*濃いねずみ色

(まるで誰れかの《たとえば君の好きなデカルトやニイチェやソクラ

82

テスやそんな人達の》魂の集りのよう)

(そして君の生涯のように深くて暗いね)

あれは天がずりおちるんじゃないあれは雲が動くんだ

(雲というものは山の上では一種の映写幕のようなもんだね)

底知れぬ谷まで落ちる木や草の急傾斜の色も今日は打沈んだ銅の色の
よう

風がなびくたびにそれらがさっさつとなりなびいて雲を動かす

(さあさあ全く頂上の岩の上までのぼり切ってしまおう)

(俗物どもを尻目にかけるに最も適当した場所に)

(そして早く君や僕を嘲笑した村々をはるかに遠く見下して
見てやるんだ)

83

バツハ

うずまく山脈の雪を掠め去り

宇宙座にまで舞い上る風がある

炎の天には

神々の怒り高く

青く走り

青くかけまわり

眼爛々白銀の山を射て過ぎる

阿鼻叫喚宇宙に満ち満ち

雪を掴み雪を投げ

物凄く山脈の胴体を打ちふるわす

瞬間立木見ええず鳥見ええず人見ええず

あるはただ雪の嵐狂いの神の嵐

遂に怒髪宇宙心をつらぬきのたうち

のたうてば倒れる既に死の雪崩に――

*非常な辛苦の中で号泣し、
救いをもとめるさま

自画像

曇った日は晴れ

晴れた日は曇り

世間が逆行してゆく

(さかしまのコップで覗いたというふうで)

宇宙は所謂幾何学的な宇宙ではない

燃え上る炎の地球の炎

僕は少しずつ燃えはじめる

恋愛行

力への意志が樹立されねばならなかったということは

感傷の解体によって証明せられる

感傷の範囲は

たとえば

惰性系の範囲を超え得なかったニュートンの力学に似ている

それは相対性原理への拡張に対する大きな欠陥があったから

いくつもの仮設が

仮設のみで終るということは正に幾何学の敗北である

88

然るに××子はアンドロメダのような女であった

それは惑星というにあまり輝しい星であつたから

彼女への仮設は感傷の群起を強いた*

*多くの人が一時に事を起
こすこと

(宵空は消えアンドロメダのみ心にのこし)

離別は遂に

相対性原理の前に崩壊し

絶望は生涯の惰性系を打ち壊した

執念

——僕はこのような詩も読みたい

愚おろか者のやつが不用意にもらした言葉が

いつまでも僕の神経中枢にひっかかって

僕は眠れないので

僕は僕をもてあまし

すっかり不愉快になつていけないのである

つまり僕という人間が

89

いつのまにか僕自身を解体して

感受性ばかりのしろものになっているのであろうか

弱者への憐憫れんぴんや

愚か者への寛大が

いつのまにか僕自身の習性となってしまうのであろうか

もつてのほかである

愚か者のやつがやつなりに僕を軽蔑けいべつしているとすれば

もつてのほかなのである

眼をつむれど怒いかれる言葉たちの連続のみがいつまでも連続し

僕は夜を掴みだし八つざきにしてやりたくなってくるのである

業

92

あるがままに進み来たりしもの
あるがままに進み来たらざりしもの
すべて

魂の運命なりや

古びた骸子よ^{がいし*}

*本物の骨でできたサイコロ

骸子の凶の目よ

ふと人生の黄昏に立ちて

ふりかえる過去

無限の悔恨の谷と丘

延々と闇にうねりてつづき

わが足元を打ちすくう

この時こそ

生と死が相接して一瞬の火花をちらすのだ
生涯の脊筋で打ちふるえるうつろな風よ

93

内 部

—— ためらいまどう友におくる

怯懦^{きょうだな*}するをやめよ

*臆病で気が弱いこと

君自身を信ぜよ

君の中にある君は

もはやのつびきならぬ君だ

それは

君であるというよりはどうにも出来ぬ君なのだ

君は

君の中に君をさぐれ

たとえそれがあらゆる人々の非難を受ける君であつても

そいつこそはほんものなのだ

君のほんものを生かせ

暴論や無智に気をかけるな

そのものが真にほんものなら

いつかはきつと人々の方から頭を下げてくるのだ

ある頁^{ページ}

96

雲は涯^{はて}しないもの

重量を失い

天いっばいをおうている

はるか曠野^{こうや}*の涯にある

烏のようにぼつんと見える小^ちつぽけな村

村に灯がついて

夕暮^{ゆぐ}が来た

雲の裏にある雲には

虹の照明^{しょうめい}がかくされているんだらう

*広々とした野

曠野につづく一本の小道を僕は歩いている

一本の小道は村にもつづき空にもつづいているのだ

瞬間風^{しゅんかんかぜ}が追いかけて来て僕の脚を折る。僕がよろめく

だが僕は歩いてゆく。僕はあとをふりむかない

やがてあたりは生涯のように暗澹^{あんたん}*とくれてしまうだらう

*暗く陰気なさま

97

海

焔する面輪おもわを音もなく通りすぎてゆく風がある

灰色のパンセ*は其処そこに原始の火と化す空であるか

遥かなる想いを捨てて

魂の凝視ぎょうしを凝視するならば海は暗みゆくのだ

火のついた衣裳のまま 火のついた衣裳のまま

生と生とをめぐりめぐる日の軋きしみの輪影を

滅びゆくその最後のものを

その境界の方向について

いま鬱々うつうつとして歴史の手は

しずかにしずかにかざしみられるのである

*思想、思考のこと

茶 談

時によつては

何次郎が何太郎に何を云つてもかまわない

何助が何之介に何を云つてもかまわない

けんかは

人間の尺度の合致でのみ起り得るものであるから

但し尺度が合っていれば仕方がない

高所から見おろしている人間は

自分を嘲笑ちやうしやうしている人間の腸はらわたの中まで見えすいて

おかしなものである

光る意志

——或いは日本人としての義務

日頃房太郎君を悪く云っていたのは誰れだ

房太郎君が悪いと思われたのは房太郎君にそれ相当の事情があった
だけだ

彼は今や立派に日章旗の下で倒れた勇士だ

彼は僕に最後の手紙をくれた

処生 函

松の木の叉またに

手負いの真鶴が一羽ひっかかって

そいつが朝つばらからギヤギヤわめきたてるので

本当に庭も風景もあつたものじゃない

曇天は空ばかりの話ではなく

僕の心の中にもうす暗い旗をなびかせているらしい

僕の頭痛持ちは

考えてみると僕ばかりのせいではないのかも知れない
案外あの鶴のあたりにあるのではないかと
松の木の鶴をにらめつけ

小石を拾って矢庭にばあっと投げつけると
一瞬一すじの血がすーと垂れたと思ったら
血のしたたる片羽だけを松の枝にのこし
鶴が一声意外な怒声を発してどこかへ
飛び去って行ってしまった

雪国小景

— A ISAMU HARADA

はるか天には
物理の神々が住み

あたりいちめん幾何学的な冷却の皮膚をなめまわし
あたりいちめんの皮膚に針を穿ち^{うが}

(村々遠く)

クモリガラスの鏡の中に

かぎられた灰青色のレンズを張る

宇宙外の宇宙の世界

やがて幾何学的な皮膚が失われる

森のかなた天が動きだす

物理の神々が顔をしかめる

灰青色のレンズはぬりつぶされる

はけ絵のように

悲哀があたりいちめんを吹き

緑ヶ丘追想

——ある一時期の魂におくる挽歌

これは大森区ですか

目黒区ですか

それはどつちでもいいのですが

雨が十日もつづいて晴れないような

そんな天候の中では

山の中の市街のような

市街の中の山のような緑したたるこの地区では

大変多い二十世紀型の赤い屋根もびしょびしょぬれ

それよりも困るのは本屋の向いで果物屋の隣の
たった一つの停車場が傘や足駄*や長靴で

充分切符も買いくらいことなのだが

真赤なコートや紫や黄色の

それにもまして君のコートはうんと臙脂^{えんじ}で*

僕はいつみても愛らしく

それが君の細い笑クボのある瓜実顔^{うりぎまがお}に似合うので

時々これはどこかの女王様の生れかわりじゃないかと考えている

そんな笑顔で君は笑ったもんだった

「大岡山じゃ歩いて行った方が早ありません？」

これはコンチタ・ズベルピアのソプラノに似た声なんだと

少し巻がかった批評家ならすっかり感心しちゃうんだけれど

そんな声がR C Aのサウンドボックスから発せられたようで

*雨の日などにはく、高い
歯の下駄

*濃い紅色

*瓜の種に似て、色白・中
高でやや面長（おもなが）
な顔

歩くことの大変自慢の出来ない僕も

自分の泥靴と君の少し泥のはねた白足袋にこりず

七つの丘や七つの谷を雨の中をふられてゆこうという趣向^{しゆきやう}について賛成

するんだったつけ

たとえば僕のことをしゃべろうとして大乘哲学^{だいじやうがく}についてしゃべったり

君は君のことをしゃべろうとして満洲へ行くなどと云ったり

とにかくお互が少しピントをはずしてあるため

どこまで行っただって僕のポエジイのように無限だったのさと

今更ながら僕は僕の追想に云ってきかせている始末です

劔つるぎの夜明けに

—— われはある朝かく感ず

われは愛する日本の夜明けを
大陸に散った幾多の正義の血は
今やアジアの夜明けの太陽の色とにじみ
かかる大どかな神代*の夜明けが
再び東海の朝をひらく

*のんびりしている

アジアの夜はアジアこそ開くべきであった
それへの懷疑が、夜の苦悶として
長く寝苦しいアジアは病んでいた
悪辣あくらつなる西方的政策を前に
果してわれわれアジアの夜は何を反省しなけりなかつたか

アジアは立った

アジア的アジアの個性は

もはや夜明けの色で染めぬかれた

再び神的個性は

盟主日本の国土をつらぬき

個性的大陸の夜明けを呼んだ

神は再びアジアにある

アジア的アジアは

もはやアジアのみのアジアではない

人類は世界のためにこそなけねばならぬ

人類のためのアジアは実現しないか果して

日本は今やますます日本刀の光をまさしめる

アジア的個性を世界的個性に

やがて宇宙のための世界を

世界のためのアジアとして

太陽を呼ぶ夜明けの前に血にそめぬかれた世界不滅を宣言する守護神

刀でこそあつた

アジアの夜明けは断乎としてかくして永遠に世界不滅の昼を呼びさま

す夜明けでこそなければならぬ

銀座で

銀座を銀座と書いてみたら
すつかり街の風景にあてはまるわけだろうが
柳の枯葉が舗道に散る
秋ともなれば暗い雲がすつかり街においかぶさり
銀座も銀座となりながら
デパートの屋上や
尾張町の角で充分野分も吹くわけだ
柳の影は舗道に長く
人どもはおのおの群集などを見ないで歩く

一体これらの意志はどこに向く
群集の心理は空虚か

銀座の屋並たちは空虚か

否ここにも二十世紀の哲学や倫理も

充分武装してあるわけだ

(フランスの今後はどうなるんだろう)

(ドイツが結局アメリカと戦争するんじゃないかね)

(民族の祭典はおもしろいよ)

(あの空にある旗は三国同盟の祝祭旗だね)

一ころ銀座マンというタイプがあった

銀座ガールというタイプもあった

その夫々がすつかり銀座タイプを見切りながら銀座を歩く

結局すれば銀座そのものにも銀座を否定するような強い意志がひめら

れているわけだ

ここでは資生堂、モナミ、オリンピックク

不二屋、森永、明治製菓等々

戦争のある国の人々は熱心に戦争を語り愛国を歌うところ

銀座の意志もいずこに向いているかわかる

曇った秋の日曜日の午後の銀座を久しぶりの友と歩けば

空には日独伊同盟の祝祭旗へんぼんとひるがえり

それを仰ぐ群集たちの胸には、きれいさっぱりと昔の銀座が消えゆく

附
録

エ
ツ
セ
イ

フロイトと詩の理解

— 僕の詩作メモより

維納^{ウイナ}の医学的心理学者ジグムンド・フロイトは彼の著名な精神分析研究過程中、夢の学説を説く前に間違いの行為乃至心理状態を述べているが、これは詩構成並びに表現に対してある意味における真理をもって理論づけていると云つてもあながち空言ではないと思うのである。以下少しその抜萃を試みよう。

フロイトは云っている。

— ある一つの正しい言葉を云う代りに他の数千のうちのどれか一つの言葉を滑らし、その正しい言葉の表現を無限に多様に変形し得ることも可能であるかも知れない。

— 或は言い間違いの効果は、それ自らの目的を追求しようとする、正当な心理行為であり、又内容と意義とを蔽している表現と解されてよい権利を持つているのだ。間違いの行為はある予期し若しくは意図した他の行為の位置に出しゃばつた、全然正式な行為であつたように思われるのである、と。

而してまた、次のような判定をあたえてい

る。

— 詩人は言い間違い若しくは他種の間違いを詩的描写の技巧に利用する。この事実だけでも、詩人が間違い例えば言い間違いを何か

意義あるものと考えて、わざわざ作ったものであることを立証している。詩人がうっかり書き損い(てな)をやつて、その書き損いが、詩中の人物の言い間違いとなつて残るなどはあり得べきではない。詩人は口滑りに依つて、読者にあるものを洩らそうと欲するのであろう。そして私達もその口滑りが一体どんなものか果して、詩中の人物がぼんやりしていたとか、疲れていたとか、さては偏頭痛の発作に襲われていたとかを仄(ほの)かす計画であるかを再考することが出来る、と。

そして最後にフロイトはいくらかの擲(や)擧(げ)をこめてこんなことを言っている。——詩人は技巧の上に言い間違いを駆使するために、口滑りを精練する術を解しているのであろう。言語学者や精神病学者より何倍か言い間違いは詩人に就(つ)て学(まな)ぶべきところが多いと申しても、決して大袈裟(げさ)な口吻(くふ)ではないのであると。

のと認めるのであるから(意識的間違いの意味は前後の意味から判明すると思うが、いざこれのことについて改めて稿を草したいと思う)ここでは便宜上そのまま使用することにする。しかしこれは、ただ単に間違いに対する反対の意味を指しているところで云つておいてもよい。蓋(ひた)しフロイトは詩人の感能(かんのう)に対して無意識的な間違いとたたづけたところにかにも科学者らしい冷徹さと理智を意味づけたのであろうが(勿論ここにはフロイト自身のミソがあり、又この小論の目的があるのだが)詩人を絶対な病的心理の所有者又は精神病者としてしか認め得られなかつたというところにフロイト自身の陥(お)つた間違いが存在するのではないだろうか。成程フロイトは間違いについての分析は入射的な脳髓をもつて分析を試みていてその広大な一大理論を残すところなく徹底させているが、例えば

以上の説を読んでみると、フロイトはある意味におけるよき詩の理解者でもあり、またその理論は詩構成上からみてその正当さにおいて六〇%位までは肯定出来得るものと考えられる。しかしこの肯定の意義において幾分皮層的な嫌(きら)いがないでもない。詩人の所謂詩的考察にもとづく比喩的表現乃至は変形構成は、その過程、結果において前者と可成(か)りな相似点を認めるも、その発生の根本においては又可成(か)りの距(へだ)たを認めるものである。即ちフロイトの説いた間違いの学説は無意識的な発生原因を有し、詩人においてはその発生原因が意識的である点である。意識的な間違いということはあまり当を得ていない言葉かも知れないが、詩人側からいえば全く正確な観察心理に基本せる言い方乃至は表現をしているにかかわらず、フロイトはその比喩的表現、変形構成を勝手に誤謬(ごびよう)またはそれに類したも

間違いの行為の中には立派な意味と意向が存しているばかりではなく、間違い行為は二つの相異した意向の干渉から出来たもので、なおその外に、この二つの意向の一つが他の意向の妨害者となつて表現を求めるためには、その表現の実行にある程度の抑圧を加えなくてはならないのである……云々、という風にクリアな緻密(ちみつ)な説明を与えているに係わらず詩人の有する詩(ポエム)にあらずポエジイ乃至はそれより発せられる詩的表現(ポエム)の発生に対して甚だ不徹底で錯誤的(さご)にまで感ぜしめるが如き所以(ゆゑん)のものは、思うにフロイトは何物(なにもの)をも索(さが)り出さねば止まぬ。即ち(1)の如く全てを合理化しようとするフロイト自身の科学者特有の本質性と、なお一方(1)の如くある部分は割り切れるが又絶対的に割り切れぬ、即ちある部分は合理化されるが、絶対に理論には合理化されぬ部分を

もっている詩（ポエジイ）特有の本質性との相剋のためではないだろうか。即ち以上の事柄を公式的に表示してみると、詩「VロムアIIの10」という風な結果になるためであると思う。然しフロイトのこの誤算は単にフロイト一人と詩との誤算ではなく、あらゆる理論と詩との誤算ではないかとも考えられる。絶対に理論では犯されぬ部分（これは永遠にしかも宿命的な謎をつつむ哲学的な部分であると思う。しかしこの部分は古来より詩人各自の脳裡では見えない詩、潜在的な詩として存在し、しかもそれは形なくして詩人自身には解されているが表示することのみにおいて不能なもの）を絶対的に理論化しようとしたフロイト！そこには六〇%の理論化が成功されたが、あと四〇%の未知数が残されたのである。その残余の未知数とは何んであるか。それこそ絶対に理論では解決することの出来ない

い内潜的ないんげんてきな詩の部分である。だが、偶然か故意か、この内潜的と名付けられた詩の部分と外表的とも名付くべき詩の部分ぶぶんが干渉して一つのポエムを表現構成する事実は、恰もフロイトが間違いの学説の後期で述べた二つの意向の干渉云々に程よくあてはめさせることが出来るではないか。だから実際において、フロイトの詩に対する見解には真理も含まれてい、また間違ひも含まれてい、と考えることが出来る。それはあたかも永久に割り切れぬ数字におけるが如きと同結果の現象をもたらすためではないであろうか。

附記 これは昭和九年頃の起稿によるものである。表現構成、ポエジイ、ポエムらの使用を煩雑にながれることをきらい、生のまま使用した。又、これらの単純な言葉たちは勿論フロイトに対する半畳を主としてはいない。むしろ詩作の始原しげんに対するいくつかの証明を志した一つの試みが主であったことをおことわりしたい。

あとがき

詩集「北方の詩」を出してから、もう三年程経った。「北方の詩」の以前に三つ程の詩集を出しているが自分ではじめて第一詩集と云つたのはやはり「北方の詩」であった。というのは、「北方の詩」は僕にとつては、一つの標式のようなものだったからである。だからそのような類型なものを多く集めた。そこからいろいろな変形をなしたいと思つたからである。だからあの詩集のあとがきでこれは僕の詩のデッサンであると書いた。僕はデッサンという言葉は画かきばかりに通用している言葉だとは思わない。音楽家にも、作家にでも、詩人にでもデッサンが出来ていなくては困ると思つている。僕が、詩のデッサンと書いた当時、二三の人が、そんな馬鹿な話がないと云つて来た。僕はただ笑つて答えなかった。僕の云う意味のデッサンとは単に平面素描のことだけでなく魂の素描ということも指していたのである。僕は思索にすらデッサンがなくてはいけないと考えている。もつと云えば人間そのものにも。デッサンのない人というものは、どうもペンキ絵のようではないようである。ときには大人が子供になつたようで、子供が大人になつたようには、どうしても考えられない時すらあることがある。これ

は余談であるが、詩集「山脈地帯」がそのような変形の可能性をもっているものであるかは別として、「北方の詩」以後公にした僕の第二詩集或いは第三詩集というわけである。この中には、随分古いものもある。七、八年前、もつものものもある。だから第二詩集だからといって、必ずしも新しいものばかりとはかぎらない。これを第一部と第二部とに分けた。僕の詩の個性の陰陽ともにも思っ分けてみた。詩集の詩を選ぶということは仲々困難な仕事の一つである。なるべく公平にと思っ分けてみたが、どうもうまくいったかどうかかわらない。しかし根本のものだけは確かに選んだつもりである。何んにしてもこの三年間は僕にはめずらしく詩の作品が多かった。この詩集の倍程の作品があるのだ。長く病気で寝ていたりした関係かも知れない。もうこわくてこんなには詩が書けないだろう。書いても厳選しちゃうだろう。第一部は多く戦争の詩を採った。又極くはじめの頃のものも入れておいた。第二部はずっと古いのが新しいのがまぎって入っている。いずれにしても、未熟ながら文学に手をそめたということとは僕の宿命かも知れないと近頃しみじみ考える。僕の周囲では僕のことをあんまり賞めたものでもないと云っている。成程と僕は考える。何故文学をやらねばならないか僕はそのことから又新しく出発しなければならぬようだ。しかしやった以上は、それをあくまで貫徹してみたい覚悟はもっている。拙いなら少しでも進歩させ、多難であれば尚更それによつてゆき

たい。俗に云えば、矢つきるまでも。暴言多謝。

序文はアジアの先覚岡倉天心の紹介者で又評論家であられる浅野晃氏に北海道旅行の御多忙中のところを御願ひ致し、この拙い詩集の光彩となし得たことを、心より感謝いたします。尚、装幀その他に一方ならぬ御世話にあずかった竹森一男氏、装幀をして頂いた相澤光朗氏、この詩集上梓に際し、少なからぬ御面倒をおかけした旗社の関口順三氏に厚く御礼申し上げます。

尚、末筆ながら常日頃自分ごときを激励して下さるあまねき先輩知友の方々に心からなる感謝の意を表します。

昭和十五年八月十日

保養中なる故郷宇奈月温泉水月「やよい」の間にて

高 島 高 識

著者略歴

本名、高島高。ペンネーム、雪口武敦。竹の波。北アルプス山脈と北海とにかこまれたる富山県滑川町大字西町に医師望碧楼半茶高島地作の二男として生る。母を静枝という。滑川男子尋常小学校を卒え魚津中学を経て昭和三年上京、某大学文科中途退学。医科を卒業し、東京での二三の病院、横浜市電気局友愛病院、富山日赤（当時陸軍病院）等の各病院勤務を経て現在は自宅にて開業す。中学二年の春、祖母、母共に相ついで失い、はじめて現実の冷顔を相対す。このことが人生の方向に多大の影響を及ぼせり。中学三年の頃より独り海辺で石投げをして知った不思議な曲球認められ、野球部投手として選ばれ、柔道部選手を兼ねる。当時コーチに來た早大の望月選手よりカーブは実に独自だと云わる。当時野球部長たりし畑久治先生（東大法学部出身）により多く哲学的な影響を受く。又級友の秀才島崎藤一にも負うところが多い。当時わからぬながら、シヨペンハウエル、ニイチエなどを借り読みし、何かほのかなる光を感じず。この頃より文学に関心を持つ。雑誌「揺籃」を編輯し、学校当局より廃刊を命ぜらる。多く詩に興味を持つようになる。昭和三年上京、三田聖坂下に下宿す。この頃より、中学で秀才であった弟明大の病重くなり、又、右眼の眼睛疲労症、脚氣相ついで起り、多く家庭的にもめぐまれず、一時は全く絶望す。二十一才の時、たまたま知り合つた大学講師Y氏に知られ、某週間雑誌に、冬木某のペンネームにてコントを発表す。それより「スフィンクス」「地平線」「ロマン」「詩学」等の雑誌による。この間「日本詩」及び「詩人時代」より夫々各諸家により、再度すいせんされる。越中谷利一氏、原田勇氏編輯の「城南」の会員となる。この頃、深く敬畏していた北川冬彦氏に知られるところとなり、雑誌「麵麴」に入る。後に「昆侖」。この「麵麴」「昆侖」の足掛五年間は、実に人間的にも、文学的にも、最も苦しい鍛練の時期であり、又最も霸氣ありし時期なりと信ず。「麵麴」の初期頃より心理学に興味を持ち、この方面の研究に従事し、又恩師木村於菟先生の御

人格に深く私淑す。突然父の病氣に会い一切のものをあきらめ、一切の親しい人々とも心なく別れ、一時郷里で家業をつぎ開業す。次いで家人のすすめで、女子医学薬学専門学校出身の高道とし子と結婚す。この頃より、伴野英夫氏、青柳優氏によって力づけられ、再び人生的にも勇氣を取りもどし詩作をはじめ。詩集「北方の詩」を上梓す。両氏の恩生涯忘るべからず。現在は、文芸雑誌「旗」、八十島稔氏編輯の詩人俳句雑誌「風流陣」らに関係す。科学ペンクラブクラブ員。前述の雑誌以外に執筆せる主なる雑誌は、「文学層」「音楽雑誌」「ムジカ」「科学ペン」「文芸汎論」「はくてい」「詩典」「三田文学」「早稲田文学」「日本詩」「歌謡詩人」「芸園」「日本詩壇」「朱樟」「スバル」「日本の風俗」「北國新聞」「オアシス」「文化組織」「詩原」等の諸雑誌あり。近來健康すぐれず、憂鬱なること多けれど、世に云うごとく、意志は肉体をたらぬく、意志はあらゆるものをたらぬく、文学によって人生的なものと闘いぬき、又確固たる意志をもって、この非常時局に対し、国民として、医師として、詩をつくるものとしての更に新しき道をきり拓いてゆかんと欲す。

終に僕は、少し大ききで恐縮なれど、日頃畏敬し愛読してやまぬ文章の一端を披瀝させていただき、この稿をおわりたいと思う。

「僕には自信がないし、ただただ筆を執るのが嫌なんだ。原稿を見ているだけでも、僕がどれほど嫌か、君には解らない。心そこから、運命が、僕を作家ときめて了わなかつたらと思う。作家とは人心を虫食む仕事だ。僕が自分の宿命を嘆いてるのではないことは確かだ。ただ文筆の世界とは、特にいとわしいしかも強力な世界だと思ふ——と云っているだけだ。美しい国土の下にふさわしからぬ地下層があるように、文学的素質というものは、生命のありとあらゆる下層に浸潤して、成長の根源に密着するものなのだ。ああ、そこが堪えられないのだ。ああ、この宿命から解放されたら。」（D・H・ロレンスの手紙の一節より）

昭和十六年二月十五日印刷
昭和十六年二月二十日発行

山脈地帯 定価 一円二十銭

著者 高島高

東京市滝野川区西ヶ原町五二七番地

発行者 関口順三

東京市小石川区柳町二四番地

印刷者 近藤亀助

発行所

東京市滝野川区
西ヶ原町五一七

旗社出版部

振替東京一〇〇三三五番

坂田徳男著

エッセイ集

思想の四季

定価二円

中岡宏夫著

小説集

野

分

定価二円

純粹文芸雑誌

月刊

旗

定価五十銭

高島高詩集

(昭和十三年度版)

北方の詩

萩原朔太郎
北川冬彦
序

価 一 円

ボン書店刊

美しい貴著詩集「北方の詩」をいただきました。一度通読してひどく引きしまった勁いものを感じ、尚およく読み返したいと思つて居るところです。(下略) — 高村光太郎氏書簡より
この詩集を読んで私は宮沢賢治氏の詩を読む様な楽しさを感じた。嘔吐を催さず様な詩許りの現代にあつて、既に人を喜ばすこのことだけでも、この詩集は立派な存在理由を持つてゐる。(中略)

この詩集には題名が示している如く、北方の詩が集められている。その大部分は北方の詩と言ふより、北方への詩と言ふ方が正しく、北方を単に感傷的に唱うのではなく北方へ進軍する意欲の歌である。北へ北へと進んで止まない心情の向う所は、「生れたる新しき原始よ、雪よ」に示されている様に強大な原始の創造力なのである。この北方への希求は外でもなく、ダイモンのな活動を意味し、凡ゆる障害を貫いて生き通そうとする意力の現れに他ならない。ここに表された北方の自然は不気味な程生命に満々たるもので、これが現在の高島氏の心の住む世界であらう。

—— 科学ペン誌評

ISBN978-4-905345-50-3

◎本書は原詩集の字組・字体に可能な限り近づけてあるが、一部の旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。また、難読の語句には振り仮名、難意の語句や著者特有の表現には*印を付し、小文字で注釈を下部に入れた。いずれも、少しでも読者の便を図ろうとしたもので、原詩集の雰囲気はいくらか損じることについてはご寛恕いただきたい。

詩が光を生むのだ 高島高詩集全集
第二卷「山脈地帯」

二〇二三年一〇月一五日

一〇四卷十別冊(分売不可)

定価 四〇〇〇円十税(セット価)

著者 高島 高

発行 高嶋修太郎

〒九三六―〇〇六八 滑川市加島町八六六

発売 桂書房

〒九三〇―〇一〇三 富山市北代三六八三―一

電話 〇七六―四三四―四六〇〇

FAX 〇七六―四三四―四六一七

印刷 株式会社 すがの印刷